

マエストロ 井上道義に聞く。

仙台フィル第356回定期「アメリカン・プログラム」への思い

●素直に聴いてほしい

僕が若かった時代・・・「アメリカ音楽」というと、まだ皆が少し卑下していたんですよ。コープランドにしろ、アイブスにしろ、ガーシュウィンだってそうだけど、大衆向きの「映画音楽」のような、流行りの「西部劇」みたいなものとして。ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーなどのヨーロッパの音楽と比べて底が浅い音楽として。貧しい敗戦国の日本人が、妬みの混ざったひずんだ見方で豊かなアメリカを見ている、そんな人が多かった。

でも、そんな時代は今や終わっていて、素直にものを捉えられる時代になったと思うんですね。

今回取り上げる「グランド・キャニオン」も、作品としてはすごくよく書けていて、お年寄から子供までわかりやすい音楽だし、底が浅いとか深いとか言う前に、音楽を聴くだけで、いろいろな想像ができるわけです。「ビリー・ザ・キッド」も、本当によく書けている作品です(・・・武満徹さんが大好きだったんだよ。口笛でよく吹いていたな・・・)。

今はもう、昔ほどやっかみなく、素直にとらえられる時代になってきていると思う。そういう時代だからこそ(僕自身も、ブルックナーとかマーラーとかショスタコーヴィチとかの大作もやるわけだけれども)、今回のようなアメリカ音楽プログラムがあってもいいじゃないか、と僕は以前から思っていたので、今回取り上げました。下から目線でもなく、斜め目線でもなく、白い目でもなく、ぜひ普通に素直に聴いてほしいと思います。

そして、「演奏が完成させる」ということ。作品そのものは実は未完成で、演奏されることによって作品は完成する・・・ぜひ、その場に来て体験して欲しいと思っています。

●コープランド:「クワイエット・シティ」

この曲の舞台は、夕暮れ時のニューヨークです。2人のソリスト、トランペットとイングリッシュ・ホルンが登場しますが、トランペットはユダヤの少年、イングリッシュ・ホルンはホームレスという役付けになっています。タイトルは「静かな都会」というわけですが、私たちの体験としても、コロナ禍によって街が「静かな都会」になってしまった日があったわけです(今はだいぶ普段とおりに戻ってきていると思いますが)。

あの、街が静かだった日を思い返すような音楽。その意味でも、いまこの曲を演奏する意義はあると思っています。

今回の演奏会のチラシに「壮大なるアメリカ」というキャッチコピーがありますが、まさにこういう感じです。アメリカって、荒涼としていて、都市をちょっと出るともう荒地で(日本みたいに家屋がずっと続くんじゃないくて)、それくらい広くて、ざらざらしている感じ。そういうことをすごく表現できた作曲家がコープランドです。街の中にも、寂しさ、荒涼としている感じがある。

この曲の演奏では、ちょっと舞台上に演出を施していますよ。

(・・・これは来てみてのお楽しみだな。新しい体験をして欲しいね・・・)



●コープランド と グローフェ

コープランドの「ビリー・ザ・キッド」、これは本当に「バレエ」ですね。

実際にアメリカでは、「白鳥の湖」とか「くるみ割り人形」とか様々なバレエ作品が都会のオペラハウスで上演されていると思うけれども、やっぱりそれはヨーロッパの世界を表現していて、かつて、自分たちの音楽は何か？自分たちの踊りは何か？という動きがあった。そうした強い思いの中で生まれたのが、まさにコープランドのバレエ音楽で、その代表的なものが、彼の作曲した「ロデオ」とか「ビリー・ザ・キッド」とかなんですよ。日本でも(年代は少し後にずれるけれども)伊福部昭や芥川也寸志という作曲家がいたように、こうした、自分たちのアメリカを作ろうとした人が、コープランドだったってことです。

コープランドは(ガーシュウィンなど当時の多くのアメリカの音楽家たちと同じく)ユダヤ系で、ヨーロッパのテクノロジーを使わずに独学で作曲を身につけた人。日本でいえば伊福部昭も武満徹も独学ですね。これに比べて、グローフェは名前からしてもドイツ系移民と思うんですが、この時代のアメリカには珍しく割とアカデミックで、ヨーロッパのテクニクで作品を残している人です。このグローフェこそが ガーシュウィンの「ラブソディ・イン・ブルー」をオーケストレーションした人ですね。彼も、いろいろ作曲していると思うんですけども、なかなか作品が演奏されないんですよ(「グランド・キャニオン」の全曲演奏も含めて)。「グランド・キャニオン」は本当によく書けている作品です。やっぱり、斜めに見るのをやめて、普通に素直に取り上げたいなと僕は思います。

●大人も、子供も、来てほしい

今回のプログラムは、すべての曲がわかりやすい、景色がうかがい音楽なんですよ。大人も来てほしいし、子供も連れて来て欲しいと思っています。(クラシックには一定の敷居があってもいいと思う面もありますが)敷居を超える、今回のような音楽から入ってもらえたら嬉しいなと思います。つまり、定期演奏会でありつつ、クラシック「入門」としてもぴったりというわけです。

マエストロの言葉

「演奏が完成させる。ぜひ、会場に来て体験してほしい」

仙台フィルハーモニー管弦楽団 第356回定期演奏会

2022年7月15日(金)19:00開演、16日(土)15:00開演

日立システムズホール仙台・コンサートホール(仙台市営地下鉄「旭ヶ丘」下車すぐ)

指揮:井上 道義

イングリッシュ・ホルン:木立 至、トランペット:浦田 誠真

コープランド:クワイエット・シティ

コープランド:バレエ組曲「ビリー・ザ・キッド」

グローフェ:組曲「グランド・キャニオン」

【全席指定】S:¥5,100/Sユース:¥2,000/A:¥4,600/Aユース:¥1,500/Z:¥2,000 ※未就学児入場不可

仙台フィルサービス TEL:022-225-3934 (平日10時~18時)

7/15(金):残席あり
7/16(土):残席僅少!